

漫画家の水木しげるさん（本名・武良茂、2015年に93歳で死去）＝写真＝は、21歳で南方の戦地に送られ、部隊全滅後、爆撃で左腕を失うという凄惨な経験をしている。作品に描く以外、家族に多くを語ることをしなかったその人が晩年、変わった。戦争のことばかり繰り返し語り、膨大な数の付箋を脈絡もなく書斎に貼り付けた。戦地や戦友の名、そして、なお生き残したことがあるというかのように、戦死者の話かくくと走り書きされていた。



水木しげる と長女・尚子さん 次女・悦子さん

(58)とも、幼い頃に戦争の話を父親から聞かされた記憶はない。戦地での話はきまって、仲良しになつた島の住民や食べ物のこと。「いつも二コ二コしている片腕のないお父さん」に壮絶な過去があることなど想像もつかなかつた。

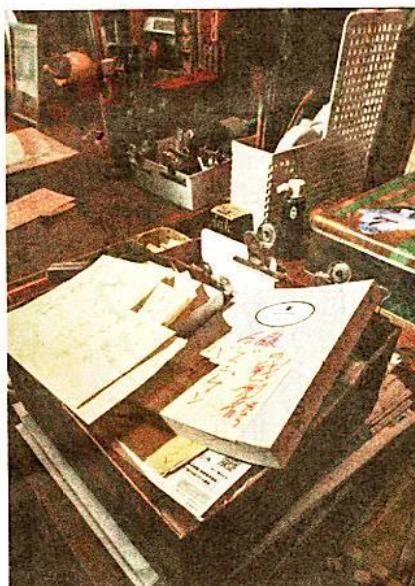
第1次世界大戦後、ドイツの植民地だった南洋諸島は、赤道以北が日本、以南は豪州などに統治が委任された。木さんは、この時期に生まれ

開戦後、日本軍は赤道以南の島々にも侵攻したが、多くが連合軍の反撃にさらされた。43年11月、豪州領ニューブリテン島に築いた拠点ラバウルで防衛のために送り込まれたのが、二等兵の水木さんが所屬する連隊だった。

ラバウルの現地司令部は、敵陣に近い南西方面のズンゲンへと部隊を差し向けて、さらにおよびのバイエンへ水木さん

前も死ね／（『水木しげるのラバウル戦記』）
空襲が日を追うごとに増えた。しかしマラリアを発症した水木さんは逃げられず、爆撃を食らった。軍医の判断で左腕が切断された。44年6月のことだ。

「漏れ出ないよう抑えていた感情が、年を取つて一気に流れ出ていた感じでした。わずか2年ほどの体験がここまで人を支配するとは」(尚子さん)。付箋の一枚には、△歩哨の順番を代わってくれといつた人▽と書かれていた。見張りを交代した兵士のことなのか、何か急な変更があつたのか、定かではない。



水木さんの書斎に貼り付けられていた
付箋。引き出しの中からも見つかった
(東京・御器所在市) 一谷大蔵三撮影

ら10人ほどの偵察要員を送り入る。そこを急襲させて。

た。生々しい戦争体験を描いた「総員玉砕せよ！」を発表したのは、漫画家として成功した後の73年だ。陽気な父しか知らないかった悦子さんは、「読んで1週間ほど打ちひしがれた」。

あふれ出た「戦死者の話」

長女の原口尚子さん(62)、
次女の水木(武良)悦子さん

お前も死ね

の植民地だった南洋諸島は、赤道以北が日本、以南は臺州などに統治が委任された。木さんは、この時期に生まれ

ラバウルの現地司令部は、敵陣に近い南西方面のズンゲンへと部隊を差し向け、さらにも奥地のバイエンへ水木さん

膨大な付箋

張りを交代した兵士のことなのか、何か急な変更があったのか、定かではない。